

「2030年の日本」を どう考えるか

理事長 谷川史郎



2030年の日本、経済規模では米国、中国、EUに次いで世界第4位にあるものの、世界経済に占める位置付けは相対的に低下しているだろう。そのような中で、日本は地政学的に米・中・ロシアという大国に挟まれ、どのような特徴を持った国として生き残ることができるか？

さらに、今より豊かな社会を形成することができるのか？ 何が、その豊かさを支えるのか？

2015年度は弊社の創立50周年に当たるが、この記念事業の一環として、全社横断チームによる「2030年の日本」プロジェクトを立ち上げた。「2030年の社会像」「政策と産業の姿」「金融と金融IT」「産業流通と産業IT」「ITサービス」「情報通信技術の動向」の6チームから構成され、それぞれのテーマを深掘りするとともに、相互の知見を共有しながら、年末に向けて全体像を作る計画で作業を進めている。

これからの日本を展望すると、少子高齢化の進展、地方消滅や財政破綻の不安、産業の競争力低下など構造問題に気を取られ、ともすると暗い将来像を想定しがちである。

このプロジェクトでは、個人の価値観や社会のパラダイムが変化することで、国のカタチや社会のカタチが変わる可能性に対するポジティブな検討への挑戦をしようとしている。

少し視点を変えて見てみよう。それぞれの国にはそれぞれの社会変化のリズムがある。たとえば、米国では大統領選挙を基本とした8年周期が知られているが、日本のそれは、30年周期といわれている（図）。

1870年頃から始まる明治維新後の政治的・社会的な混乱は、およそ30年間続いた。その後、富国強兵を基本に欧米を追いかける「坂の上の雲」の時代が30年。1930年の世界恐慌から第2次世界大戦に敗戦し、焼け野原から復興するまでの混乱期を30年経験している。1960年の所得倍増計画から87年のブラックマンデーまでは、高度経済成長、バブル経済と続き、一億総中流といわれるに至る豊かさ追求の時代であった。そして、1990年のバブル崩壊とともに、「失われた20年」といわれる閉塞感の時代からは、完全には脱しきれていない。

日本社会は、古いパラダイムの崩壊と新しいパラダイムの確立を、およそ30年ごとに繰り返してきている。この点から見れば、これから始まる2020～50年の30年間は、それまでの「失われた20年」の閉塞感を打破して、日本の新しいパラダイムを確立するタイミングであるともいえる。

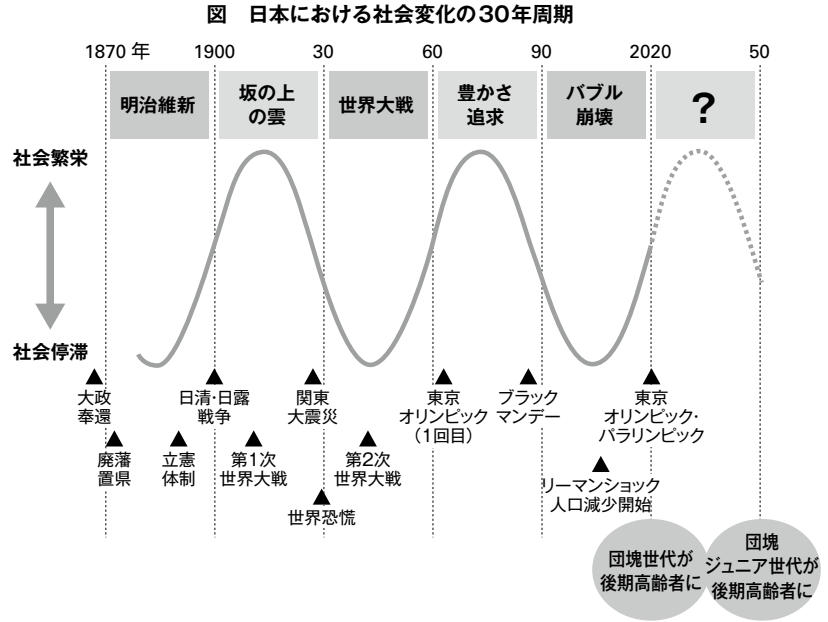
変化の萌芽は既に社会のいろいろなところで見られる。財政が厳しくなる中で「公（国）」

の地盤沈下が進み、社会保障問題は各人が自分ゴトとして考えざるを得なくなってくる。特に、医療技術のめざましい発展に対して、新医療技術を医療保険制度にどのように調和させていくのかなど、根源的な議論が始まっている。このことは、日本社会にいろいろな意味で影響を及ぼしてきた団塊世代が後期高齢者（75歳以上）になる2022～24年頃から一層顕著となる。

このことと並行して、過去数十年忘れられがちであった、「公」と「私」の間にある「共（コミュニティ）」の役割が、あらためて見直されるようになってくる。

豊かさの指標としては、単なる経済規模ではなく、いかに異質なものと触れ合う機会が多いか、また個人の選択肢が多いか、すなわち多様性が重視され始めている。このような動きは、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを契機とした海外からの交流人口の増大により、一層加速するであろう。

日本経済のアキレス腱として常に存在するエネルギー問題に関しては、水素エネルギー社会の構築による解決策が議論され始めている。水素を貯蔵・供給・消費できる社会インフラを構築することで、極めてクリーンな社会を作ることができる。さらに、太陽光や風力など、出力が不安定なエネルギー源から出てくるエネルギーを水素として貯蔵することで、自然エネルギーを利用しやすい環境を作ることができる。日本を含むエネルギー源が乏しい国には、極めて望ましいエネルギーサイクルの一つとなる。日



本はこの分野をリードする可能性を持っている。

企業競争の観点から見れば、革新的な情報通信技術を活用して、従来の事業カテゴリーを超越し、時空間を超えて顧客と密着するグローバル企業のより一層の発展が想定される。GE、アップル、アマゾン、IBM、ウォールマート、セブン・イレブン、ドイツ・ポスト、クロネコヤマトなど、まさに「4次元企業」の競争が始まろうとしている。

一方、こういった国境を超えて自由に活動する「4次元企業」に対して、各国政府の課税、個人情報保護、独占禁止など、新たな命題も次々と出現してくるであろう。

これらは現在各チームで議論しているテーマの一部であるが、その変化はいずれも、日本人の考え方や行動様式にいろいろな影響を与え、結果として、2030年の日本のあり方に大きな影響を与えると想定している。

これから毎月、チームごとの検討結果を順次紹介していく予定である。読者の皆様から忌憚のないご批判を頂戴できれば幸いである。

(たにかわしろう)